**立教大学学術推進特別重点資金（立教ＳＦＲ）**
**大学院生研究**
**２０１３年度研究成果報告書**

| | | | |
|---|---|---|---|
| **研究科名** | 立教大学大学院　研究科　文学　専攻フランス文学 | | |
| **研究代表者** | 在籍研究科・専攻・学年 | 氏　名 | |
| | 文学研究科　フランス文学専攻 6 年 | 河野　美奈子　印 | |
| **指導教員** | 所属･職名 | 氏　名 | |
| | 異文化コミュニケーション学部 教授 | 小倉　和子　印 | |
| **自然・人文・社会の別** | 自然　・　[人文]　・　社会 | **個人・共同の別** | [個人]　・　共同　名 |
| **研究課題名** | マルグリット･ デュラスにおける仏領インドシナ | | |
| **研究組織** | 在籍研究科・専攻・学年 | 氏　名 | |
| | フランス文学専攻博士課程後期課程 6 年 | 河野　美奈子 | |
| **研究期間** | ２０１**３**　年度 | | |
| **研究経費** | （支出金額）　200 千円　／（採択金額）　200 千円 | | |

**研究の概要**（200～300 字で記入、図･グラフ等は使用しないこと。）

本研究の目的は、フランスの女性作家、マルグリット･ デュラスの作品における仏領インドシナを重点的に研究し、インドシナという異質な地がいかなる影響を作品の中にもたらしているかを明らかにすることである。ヌーヴォー･ ロマンの一人として数えられるマルグリット･ デュラスは、多角的な方面からアプローチされている作家である。しかし、インドシナをテーマにした研究はまだ少ない。それは、インドシナという地が、単なるデュラスの生まれた地という見方でしかまだ捉えられていないことが大きな理由の一つである。しかし、作品を考察することでインドシナをデュラス自身がより観念的なものへと昇華させようとした試みが作品の中に読みとれる。そのため本研究を進めることで、新たなデュラス観を提示できるのではないかと考えている。

キーワード（研究内容をよく表しているものを３項目以内で記入。）

〔20 世紀フランス文学　〕〔植民地研究　〕〔東南アジア研究　〕

研究成果の概要（図･グラフ等は使用しないこと。）

1940 年に出版された『フランス植民地帝国』（*L'Empire français*, 1940）は、作家マルグリット･デュラス（Marguerite Duras）が植民地省に勤めていたときに上司フィリップ･ロック（Philippe Roques）とともに執筆した当時の植民地紹介本である。

しかしながら、デュラスの最初に出版された書物であるにも関わらず、『フランス植民地帝国』はデュラスの著作とはされておらず、長い間無視され続けられていた。それは、デュラスが作家となる前に植民地省での一公務員として書いたものであり、後のデュラス作品に見られる植民地主義への批判的立場とは正反対のものだからである。そのため、デュラス本人からもデュラス作品の読者からも本書は都合の悪い書物とされてきたのである。しかし本当に『フランス植民地帝国』とデュラスの文学作品を切り離すことができるのだろうか。本年度は『フランス植民地帝国』を考察の対象として、デュラス研究への新たなアプローチを提示すること目的とした。また本研究の発表の場として、『立教大学フランス文学紀要』43 号への論文掲載と、2013 年度日本フランス語フランス文学会関東支部大会での口頭発表を目標とした。

まず、『フランス植民地帝国』を研究するにあたり 3 つの方向からアプローチすることを試みた。初めに、歴史的観点から、『フランス植民地帝国』が書かれた経緯を探った。次に、デュラスと『フランス植民地帝国』の関係性を明らかにすることを試みた。デュラスが植民地省で働くことになった経緯はまだあまり知られておらず、後に植民地主義に批判的立場をとっていたデュラスとはかけ離れていた。そのためデュラスが『フランス植民地帝国』執筆に携わった経緯を明らかにすることにより、最後にこの著作から彼女の文学作品にアプローチすることがデュラス研究において重要であることを示した。

**1.『フランス植民地帝国』が出版されるに至った歴史的背景**

『フランス植民地帝国』は 1940 年 5 月 3 日から 24 日まで「第 2 回フランス植民地サロン」を機に出版された。3 枚の地図を付した全 5 章からなる本書は、フランスが植民地帝国となる歴史や、各植民地の自然、産業、軍事力そしてフランスの植民地での貢献を記した、フランス植民地紹介カタログとなっている。

『フランス植民地帝国』が出版された背景には、第 2 次世界大戦が大きく関わってきている。それまでのフランスと植民地の関係は、1931 年に開催された「パリ万国植民地博覧会」に代表されるような、圧倒的優位に経つ白人とエグゾティスムを誘う現地民という色合いが強く、白人を頂点に複雑な人種のピラミッド構造になっていた。しかし、第 2 次世界大戦開戦直前に開かれた「第 2 回フランス植民地サロン」は以前のような文化的展示物はごく最小限に留められ、軍事的展示物がその大半を占めた。また、宗主国と植民地の関係も、白人の優位は変わっていないが、協力しフランス帝国を維持することを目標とすることに変わっていった。そのため、「第 2 回フランス植民地サロン」の開催に合わせて出版された『フランス植民地帝国』も、当時のフランスにとって脅威となっているドイツに抵抗する意志がはっきりと読みとれる。『フランス植民地帝国』前文においても、宗主国と植民地という枠組みをこえて、フランス帝国の一員としてともにドイツと戦うことが必要であると説かれており、フランス革命以来の共和国の理念である、「一にして不可分の」という言葉を掲げることにより、フランス国民に植民地との連携の意識を芽生えさせようとしたのである。

では、このようなドイツの脅威におびえる混沌としたフランスの情勢のなかで出版された『フランス植民地帝国』とデュラスはどのように関わっていったのだろうか。

**2.『フランス植民地帝国』とデュラス**

1937 年 6 月に植民地省で働き始めたデュラスは、植民地間情報資料課(Service intercolonial d'information et documentation)に配属となった。1939 年から出版部門の契約職員(attaché contractuel de presse)として上司フィリップ･ロックとともに、『フランス植民地帝国』執筆にとりかかるのである。

デュラスが植民地省に勤める経緯には、インドシナで教育者として働いていた両親の影響があるのではないかと考えられる。両親の影響を明確に示す証拠はないが、デュラスの伝記を書いたジャン･バリエ(Jean Vallier)は、デュラスが植民地省に勤めることになった経緯には、彼女の父親の知り合いであるアンリ･グルドン(Henri Gourdon)が関わっていたのではないかと示唆している。インドシナ時代にデュラスの父と懇意であったグルドンは、当時インドシナの経済機関の所長に任命されていた。また、デュラスの母親も、デュラスをインドシナ連邦政府や植民地省との連絡役としていたことが指摘されている。

さらに、『フランス植民地帝国』を執筆したことは、デュラスの作家としての活動を後押ししたと考えられる。デュラスの伝記を書いた、ロール･アドレール(Laure Adler)は、植民地省の大臣ジョルジュ･マンデル(Georges Mandel)と、上司フィリップ･ロックが、デュラスの文才を見抜き、『フランス植民地帝国』出版に関わらせるために、

研究成果の概要　つづき

出版部門へ異動させたと書いている。また、デュラス自身も、『フランス植民地帝国』を出版したガリマール社の社長ガストン・ガリマール(Gaston Gallimard)への手紙に、自分は『フランス植民地帝国』の著者であるが、作家として出発したいので原稿を見て欲しいという旨を書いた。確かに『フランス植民地帝国』は、デュラスにとって都合の悪いものだったが、それと同時に「書く」という行為により作家としての自身も目的を見出したと考えることができるのではないだろうか。植民地主義に対しては鋭く批判しながらも、現地の入植者に対して曖昧な批判しかできなかったことは、入植者であった彼女の両親が大きく影響している。このようなアンヴィヴァレントな感情はデュラスの文学作品において重要なテーマである。そこに植民地省での勤務、『フランス植民地帝国』の執筆経験も、重要な要素として後の文学作品に関わっていくと考えられる。

3.『太平洋の防波堤』から見る『フランス植民地帝国』

それでは、実際に『フランス植民地帝国』とデュラスの文学作品にはどのような関わりがあるのだろうか。そのため『フランス植民地帝国』のインドシナ項目とデュラスの自伝的作品『太平洋の防波堤』を比較し考察した。『太平洋の防波堤』はデュラスによる初の自伝的作品であり、『フランス植民地帝国』が出版された 1940 年から 10 年後の 1950 年に出版された。『太平洋の防波堤』を比較対象として選んだ理由は、デュラスがこの著作以降作家として独自のスタイルを確立していくため、この小説ではデュラスが作家となる前の片鱗が見出せるのではないかと考えたからである。

まず、『フランス植民地帝国』のインドシナの自然の描写と『太平洋の防波堤』における自然の描写の共通点を挙げ、デュラスの『フランス植民地帝国』の執筆経験が『太平洋の防波堤』にも反映されていることを指摘した。

デュラスはインドシナの自然を重要視しており、作品のなかでインドシナの森や川をインドシナで生まれた子供達とフランス人である母親を隔てる境界線として配置している。『フランス植民地帝国』においてもインドシナの大河は他の植民地よりも重要視されていることからも、二つの作品のあいだには関連が見出せることを明らかにした。また、大河はデュラスの「絶対的なイマージュ」として様々な作品のなかで繰り返されていることからも『フランス植民地帝国』の影響が、『太平洋の防波堤』だけでなく他の作品にも及んでいる可能性を示した。

さらに、『フランス植民地帝国』と『太平洋の防波堤』は植民地主義批判という観点からも考察できる。『フランス植民地帝国』においてフランスの恩恵として礼賛された、農地開拓、ゴムの生産、道路事業は『太平洋の防波堤』では、抑圧される側から描かれ正反対の立場をとっている。とくに耕作地の描写は、デュラスの母親の実体験とも重なり、デュラスの『フランス植民帝国』執筆経験にたいして、より複雑な感情を抱かせる要因になったと考えられる。そのためデュラスは作品を「書くこと」により、自身の考えとは異なった『フランス植民地帝国』を書いたことへの責任を取ろうとしたのではないかと考えることができるだろう。

『フランス植民地帝国』はプロパガンダ作品であるため、デュラス自身の作品に数えるのは確かに無理がある。しかし、デュラスがまだ作家になる前に初めて執筆した、『フランス植民地帝国』と彼女の文学作品とのあいだには多くの共通点を見出すことができ、作家デュラスに関する資料としては大変興味深いものである。

『フランス植民地帝国』は、第二次世界大戦開戦直前において、迫るドイツの脅威が強く意識されている。そのため、フランス国民として植民地の重要性が叫ばれたが、従属関係が変わることはなかった。

インドシナで生まれたデュラスは、父が死に経済的に困窮したことにより、白人の子としてではなく、現地の子供として育った。そのため、植民地にたいして複雑な思いを抱き、とくに理不尽な役人や役人の不正には憎しみを抱き、断固戦う姿勢をとり、その思いは彼女の晩年まで続き、作品の中に受け継がれ、根底に流れるものとなった。

『太平洋の防波堤』と『フランス植民地帝国』との共通点である森や大河といった自然の要素は、デュラスが作品における街、さらにいうと作品の世界を作り上げる上で重要なものとなった。インドシナの自然が単にその地にとどまることなく、インドのカルカッタや日本のヒロシマとつながってゆく。そうして作り上げられた街は観念的なものとして作品の中で動き出す。そのため、『フランス植民地帝国』をより深く研究するためには、『太平洋の防波堤』だけではなく、他のインドシナを舞台にした作品、さらには自伝的作品以外にも分析の手をのばすことが必要である。そのことによって、デュラスの新たなインドシナ観、アジア観が浮かび上がってくるのではないかと考えている。以上の研究は、『立教大学フランス文学 43 号』への論文として掲載し、2013 年度日本フランス語フランス文学会関東大会（2014 年 3 月 8 日、於首都大学東京）において発表された。

**研究発表**（研究によって得られた研究経過・成果を発表した①～④について、該当するものを記入してください。該当するものが多い場合は主要なものを抜粋してください。）

①雑誌論文（著者名、論文標題、雑誌名、巻号、発行年、ページ）
②図書（著者名、出版社、書名、発行年、総ページ数）
③シンポジウム・公開講演会等の開催（会名、開催日、開催場所）
④その他（学会発表、研究報告書の印刷等）

①河野美奈子、「『フランス植民地帝国』におけるデュラスとインドシナ」、『立教大学フランス文学』（立教大学フランス文学専修紀要）、N°43、2014 年、89 頁。

④「マルグリット・デュラスの『フランス植民地帝国』におけるインドシナ」（2013 年度日本フランス語フランス文学会関東支部大会、2014 年 3 月 8 日、於首都大学東京）